

序 説

勤務先が耳鼻咽喉科を標榜していなくとも、頭部のCTやMRIで偶発的に副鼻腔の腫瘍を認めた、 ^{18}F -FDG PETで鼻腔にFDGの異常集積を認めた、などの理由から鼻副鼻腔のCTやMRIが施行され、診断レポートの作成に迫られた経験はないでしょうか？ 普段は頭頸部画像診断にほとんどかわらないけれど、鼻副鼻腔のCTをなんとなく危うい思いをしながら読影せざるをえなくなったことはありませんか？ そんなときほとんどの先生方は頭頸部領域の画像診断に関連する書籍を引っ張り出し、それを参考にしながらレポートを作成していることと思います。

洋の東西を問わず、頭頸部画像診断学の優れた教科書はたくさんあり、疾患名、提示画像、図の説明などとともに、一般的知識、診断基準や治療法などがまとめられています。実践的なレポートの作成法を鼻副鼻腔領域について系統的に記述したものはないと思います。インターネットは多くの情報を手軽に得られる優れたツールですが、レポート作成のポイントについて具体的に詳述したウェブサイトを私は目にすることがありません。

そこで本特集では鼻副鼻腔領域のCT・MRIの画像を提示し、“患者の診療に役立つレポート”を完成させるために必要な基礎知識、画像のどこに注目し、どのように観察し、得られた情報をどのように解釈して文章にまとめればよいのか、といったことに主眼を置いて疾患別にまとめました。

執筆は頭頸部画像診断について豊富な臨床経験をおもちの先生方にご依頼しました。まず、鼻副鼻腔とその周囲の正常画像解剖については勇内山大介先生らにお願いしました。次いで、CT・MRIのレポート作成については、齋藤尚子先生に副鼻腔炎、高井由希子先生らに良性腫瘍、久野博文先生に悪性腫瘍、荻野展広先生らにそのほかの重要な疾患について、初学者にもわかりやすく、ベテランにも新しい発見があるように解説していただきました。奇をてらった面倒そうなテーマであったにもかかわらず、皆様執筆を快諾してくださったと聞きおよんでいます。この場を借りて感謝の意を表したいと思います。

でき上がったものを通読してみると、外傷を除けば日常診療においてCT・MRIで遭遇する大部分の鼻副鼻腔疾患は網羅されたと考えています。鼻副鼻腔領域の画像診断に苦手意識のある先生方にも、自信のある先生方にも、読影室、検査室などで今すぐお役に立つ特集になったと確信しています。試しに一読してから、鼻副鼻腔のCT・MRIを読影してみてください。

浮洲龍太郎